水戸・日立 ビジネス特急 誘拐事件

浅川純

講談社文庫

著者 浅川 純　1940年、那覇市生まれ。京都大学法学部卒。日立製作所入社、18年間勤務ののち退社。1986年『世紀末をよろしく』でオール讀物推理小説新人賞を受賞、作家活動に入る。『社内犯罪講座』(新潮文庫)、『平成カイシャイン物語』(実業之日本社)、『人生リフォームing』『しあわせのわけまえ』『浮かぶ密室』(以上、講談社文庫)等、著書多数。

水戸・日立ビジネス特急誘拐事件
浅川 純
© Jun Asakawa 1997

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1997年8月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。(庫)

ISBN4-06-263575-5

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

水戸・日立ビジネス特急誘拐事件

浅川 純

講談社

目次

プロローグ……7
L特急スーパーひたち3号……11
生ごみ置き場のシュクベン……60
スーパーひたち7号……84
結婚のなりたち……112
ラッキーな男……135
暗転……171
告別式……192
ツートンカラーの電車……217
社立探偵の気休め……276
霊前のダイアローグ……308
エピローグ……356
文庫版あとがき……360
解説――山前 譲……367

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

水戸・日立ビジネス特急誘拐事件

プロローグ

女性秘書はいらいらしていた。

朝っぱらから、ひっきりなしの電話だ。

始業の九時を過ぎているから、間々あることだが、上司への取り次ぎを求める用件ばかりだから、うんざりする。そのたびに、

「立ち寄りしていまして、まだ出社しておりません」

「何時に出られますか」

「申し訳ございません。出社前に立ち寄りしてくるとは聞いておりますが、何時までにと言わないときは先方のご都合次第ということなので、わかりかねますが……」

と、言い訳しなければならない。

実は、上司から『立ち寄りしてくる』とも聞いていないのだ。しかし『まだ出社しておりません』とあからさまに無断遅刻だといっては、秘書としていかにも芸がない。なんとなく、やむをえない事情なのだ、という感じを匂わして上司の顔をたてる。

その代わり、〈そんなことも把握しないで、よく秘書がつとまるな！〉と蔑(さげす)まれたような

気がして、面白くない。いらいらして、胃が痛む。
上司の自宅のマンションにも二度かけたが、いずれも留守番電話のテープが空しく応えるだけだった。
会社に向かっているのだろう。
が、昨夜帰宅しなかったのかもしれない。客の接待で遅くなると、よくビジネスホテルに泊まったりするのだ。
〈いずれにしても、電話一本入れてくれてもよさそうなのに……〉
むくれるそばから、また、ベルが鳴った。
しかも、外線からの直通電話である。
緊張を覚えながら、右手にペンを構えてから、左手で送受器を取って、
「はい、営業部でございます」
「……セックレッタリィ？」
いきなり、女性の声が聞いてきた。
秘書か、と聞いているのはわかるが、イエスととっさに口に出るほど、英語に慣れていない。それに、声の主も、英語が母国語でないのは歴然の、ぎごちない発音である。めったにないことなので、身構えながら、
「……はい、さようでございますが」

よそよそしく敬語で受けると、
「ボス、イル？」
「……席をはずしておりますが」
「イルワケナイネ」
ふふん、と鼻で笑った。
「どちら様でしょうか」
「アンタノボス、スケベーオジン、タカタンバーバ、ホテル・シャンバーレ703、ワカッタ？」
風俗関係の女らしい。
押しつけがましい物言いに、顔をしかめながら、書きつけたメモを見やって、
「高田馬場（たかだのばば）のホテル・シャンバーレ、703号室、ですね？」
平静を装って、復唱した。
「ソウ。チェックアウト、イレブンエーエム。ポリスガキタラ、ソレマデ」
よく意味がとれないままに、
「……あの、どちら様で？」
聞き返すと、一呼吸おいて、
ガシャ！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

押し当てた耳に、有無をいわさぬ、噛み潰したような不快な音が響いた。
反射的に、送受器を引きはがした。
〈どういうこと？〉
とまどいながらも、〈ポリスとは、警察……〉と気づくと、得体の知れない恐怖が襲ってきて、身震いが走った。
腕時計を見た。
すでに、九時三十分をまわっている。チェックアウトの十一時になると、警察騒ぎになるらしい。はったりやいやがらせかもしれないが、ともかく、ぐずぐずしてはいられない。
椅子から立ったとたん、机上の電話が鳴った。
今度は、社内か、交換台取り次ぎの電話だ。いくぶん安堵しながら、送受器を取り上げて、耳に当てると、
「受付です。ご面談をご希望のお客さまがお見えです。ご都合はいかがでしょうか……」
耳になじんだ受付嬢の声が、客の名前と社名を告げた。
初めて聞く名前で、以前に応対したことがあるとは思えない。
それに、よりによって、ライバル会社の人が直接訪ねてきたことも、まったく例がなかった。

L特急スーパーひたち3号

1

上野に着いた。

山手線を下車した友平裕一は、人込みに沿って階段を昇り、連絡通路を進んだ。もう何度出張で通ったかしれない。

が、常磐線の発車案内板の前まで来ると、歩を止めて、見上げた。L特急ひたち号は発車時刻によって、ホームが一六番だったり、一七番だったり、一番端の一八番だったり、たまには中央の一〇番だったりするからだ。

〈十時発のは……スーパーひたち3号で、一〇番ホームか……、さいさきは悪くないな〉

縁起をかついで、ほっと吐息がでた。

常磐線といえば、上野から北に向かう線路で、かつての常磐炭坑をしのばせるから、イメージは暗い。しかも、一段低い、どん詰まりの一八番ホームだったりすると、陰鬱な気分になる。

それに比べれば、一〇番線は山手線のホームと同じ高さだし、乗客筋も都会的で明るい感

じがする。
もともと、縁起をかつぐタイプではない、エンジニアの友平だが、因縁がらみの受注合戦の正式決定二日前になって、強行策にでる出張だけに、さすがに祈りたい気持ちになっていた。
一〇番ホームに降りると、ちょうど列車が滑り込んできた。
白線に沿って並んだ少年たちが、カメラを向けている。二月二十六日だから、春休みにはまだ早い。期末試験休みか何かででもあるのだろう。
友平は大学時代に鉄道研究会というサークルに属していた。会社に入ってからは、ただただ仕事が忙しく、趣味どころじゃない二十年近くが過ぎたが、話題性のある特急列車に接すると、目を細めて眺める気分になる。
列車の前面が電光板になっていて、ブロック模様が躍る中に、《スーパーひたち》という文字が流れでる。発光ダイオードの表示なのだが、パチンコ屋やラーメンチェーン店の看板のようで、軽々しい。
〈今まで通り、肉太のゴシック体できちっと書かれた車名表示のほうが落ち着きがあって、列車という重厚な乗り物にふさわしいんじゃないか〉
オールドファンらしい感想をもった。
しかし、現役の鉄道ファンである少年たちには、ハイテクっぽい電光が、最新式の電車に

ふさわしいシンボルとして、たまらなくカッコよく映っていることだろう……。

指定券を確かめた友平は、3号車に乗り込み、中ほどの席にコートを置いてから、ホームに戻った。重要書類が入っている鞄は、手元から離すわけにはいかない。

グリーン車は隣の4号車だった。ドアから少し離れた位置に控えて、腕時計を見る。

〈九時二十五分、か。部長が来るのが発車十分前として、二十五分も立って待たなきゃならんのか〉

ため息がでた。

が、毎度のことなので、毒づく気にもならない。

しばらく列車の椅子に座っていて、頃合いをみてホームで待ち構える手もあるが、座っているときに部長が来たら、コトだ。平社員ならともかく、課長の自分を怒鳴るはずもないが、後々じくじく嫌味たっぷりいじめられるに決まっている。

そんな目にあったら、せっかく三十分も早く着いた甲斐がない。

友平は鞄から一束の技術資料を取り出して、見入った。今回のファクトリーオートメーションシステムの概要と交渉経緯を、急遽係長の岩山にまとめさせたもので、相手の相原産業の社長がどんな質問をしてきても、わかりやすく答えられるよう、復習しておかねばならない。

しばらくたって、

「やあ、おはよう」
ふいに声をかけられた。
顔を上げた友平は、
「あっ、部長、おはようございます」
あわてて頭をさげた。
「女房が気遣って、川口駅まで送ってくれた。京浜東北だと、赤羽で乗り換えなくてすむからな」
「なるほど。さすがに心配りがいきとどいていらっしゃいますね」
友平はすかさず愛想を言った。
鶴田部長は、それには答えず、コートのボタンを外して、内ポケットを探りながら、
「なんだか、上着がすかすかする。……席は何番だったかな」
友平は書類を左手に持ち替えると、
「お持ちしましょう」
差し出した右手で、部長の薄い革鞄を取った。
心なしか、部長のコートがだぶついて、年寄りじみて見える。財布を取り出してひろげ、指定券をつまみ出す動作もたどたどしい。
〈急に老けたみたいだ……。さしもの〝濃縮ウラン〟も、病みあがりのやつれは覆いようも

ないな〉

痛々しく思った。

が、今日の出張は部長が言いだしたことだ。

相原産業に三橋機械のフライス盤を最初に売り込んだのは鶴田で、以来二十五年にわたって多くの機械を納めてきた。そうした商談を通じて、鶴田と相原社長とは、いわゆる〝つうかあ〟の仲になっている。今回のシステム案件を受注できる見通しが暗いと聞いて、病身をおしても膝詰め談判に出向こうというわけだ。

〝濃縮ウラン〟というのは、友平ら部下が密かに部長につけているあだ名で、小柄で小太りな身に意欲をみなぎらせて仕事にあたる様は、まさにエネルギーの塊だ、という意味合いである。

畏敬の念からきているのはもちろんだが、

《四六時中はっぱをかけられても、凡人にはついていけないよ》

というぼやきも含んでいる。

「グリーン車はこの一両だけです。車両の半分が禁煙車になっていて、ご希望で、そのほうをお取りしたと秘書が言っていましたが……」

友平は確かめるように、言った。

『禁煙席を取るようにって、見舞いに行った人が言付かってきたのですが、間違いないでし

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com